

テーマセッション③の総括

青山亨

本セッションでは、「人の集団」（「集団」は民族、文化、宗教、国民から成る）にあらためて着目した。「集団」のなかにさらに「下位集団」があつて、互いに共存している。そこにフローが加わるなかで、われわれはどのような関係性をとりむすんでいくべきか、という点が全体のテーマだった。そのなかでのキーワードが、「寛容・非寛容」である。

金戸報告の台湾のケースでは、日本との共通性もあるという印象を受けた。北東アジアの共通性を見ることができる。先住民があるなかでの、多民族国家・多文化社会→グローバル化の登場にともなう「寛容・非寛容」の問題が発生している。青山報告におけるインドネシアは、海でつながった地域で、「他民族多文化」状況にある。「国家」という境界線ができ、グローバル化を迎えたことによって生じてきた問題を見てきた。ドゥラン報告では、9.11のテロについて、「プロテスタント牧師がカトリックの教会に自爆的につっこむ」という、アメリカ版タリバーンの事件を取りあげることで、あらためてふりかえった。これは、「9.11に対してわれわれは理解できているのかどうか」という問題提起だったように思う。皮肉なことに、この事件は、「メキシコ系のカトリックのはじめての聖地を、プロテスタントのアメリカのなかにつくり出す」という思いがけない結果を生み出した一つの事例だった。柳原報告は、メキシコ系アメリカ人であるチカーノの不良・パチューコの言説についての分析だった。多義的な理解が可能な報告だったと思う。自分の理解では、パチューコの「自分たちは、テキサスレンジャーにやられたからやりかえす」というある種の「憎しみの表象」がそこには描かれていた。「寛容・不寛容」の背景には、人間の心理としての「憎しみの感情」があつて、それを消化していくことで、「記憶」との折り合いをつけることができるのではないかと感じた。鈴木報告では、ブラジルでは「混血」というフィクションが成り立っていたが、経済格差という現実にともなつて、フィクションがフィクションだということが露呈してしまう。それによって、「人種」の問題が浮かび上がってくるという「寛容・非寛容」の問題が示された。

まとめるならば、まず第一に、「寛容」と「非寛容」の問題が、誰の誰に対する「寛容」「非寛容」なのか。そのエージェント・主体性の問題を、常に意識しておかねばならないということがある。第二に、地域研究において、「歴史軸」をしっかりと投入する必要がある。第三に、トランスナショナル／トランスカルチュラルということについて、ぼんやりした「境界」がそれ自体、時間と共に変化していく。あたかも液体のようにじわりと、両方向的にいきあっているイメージが見えてきた。

「寛容・非寛容」を考えるさいに重要なものとは、「公共性」もしくは「公共圏」、つまり「対話できる場」をしっかりと確保していくことだ。それぞれの人間集団の思い・考えを、暴力や憎しみに陥らずに、議論することができる場が必要である。